

令和7年度
中野市立高社中学校
被爆地派遣事業報告書（長崎市）



① 「ピースフォーラム平和学習①」

金井 虹璃

② 「長崎平和祈念式典」

齋藤 翠

③ 「ピースフォーラム平和学習②」

富井 玲葉奈

「ピースフォーラム平和学習①」

高社中学校 3年

金井 虹璃

8月8日に参加した青少年ピースフォーラムで、被爆者である三瀬清一郎さんが実体験を語ってくださった。戦争によって傷つけられた心の内を、確かに聞くことができた。

今から80年前の1945年8月9日午前11時2分、長崎県に原子爆弾が投下された。アメリカ軍の空襲警報が解除され、お昼ご飯を食べようとしていたところだった。「ピカッ」と辺り一面が白い光に覆われ、直後に爆音と爆風が町を襲った。遠くにいるはずの人々の視界には、巨大なきのこ雲が目に入ったが、何が落ちてきて、街に何が起こっているのか、分からなかった。投下された場所の中心にいた死者数及び負傷者数は約15万人にも及び、人々は一瞬にして体全体に火傷を負った。火傷した人々は水を求め、下の川へ飛び込んだ。中心地から半径4km程度の場所までの建物が跡形もなく灰と化した。爆風の強さに圧倒されて横倒れした母子、顔に火傷を負って救助を待つ兄弟、数えられないほどの遺体があった。火傷の痛さのあまり早く楽になりたいと願い、自ら死を選ぶ人もいた。亡くなった人は学校のグラウンドで火葬された。また、直接的な被害だけで、戦争は終わらなかった。原爆が投下されることによって放たれる放射線を大量に浴びてがんにかかり、最終的には亡くなってしまう人々。当時は、現代のようにインターネットの普及がなかったため、川の水は飲んで問題はないか、戦後かかってしまった病気は何なのかという情報が分からなかった。今と昔の違いは、そこにあるのだと思う。入籍するにも、「被爆者」であることを隠していた。差別されてしまうからだ。また、爆風被害を受けた建築物はほとんどが吹き飛ばされ、残されているものも少ない。当時の地層には、茶碗の欠片や放射線を浴びた瓦などが紛れていた。空襲の映像や怪我をされた人々の血痕など、私にとっては衝撃的なものもあった。しかし、実物を拝見できたからこそ「戦争の愚かさ」を実感できた。もう二度と原爆を落としてはいけないという理由から、日本国内の多くの人々が「核を廃止しよう」と切望する。何故、核兵器は今でも増え続けているのか、何のために作られるのかを考えた時、すごく難しい問題だと思った。

「勝ちも負けもない、戦争をして残るのは悲しみだけ」三瀬さんの言葉が印象に残った。

つまり、どこの国も、戦争を起こして勝敗を決めることには意味がなく、人を殺すことは「平和」に反した行為であるということだ。「世界中の人々の命は平等で尊い」という、命を大切にする考えは、いつの時代も誰にとっても当たり前の考え方であると思っていた。しかし今でも核兵器を作り続けて所持する国はいくつかある。そのうちのいくつかの核兵器の威力は、広島・長崎に投下されたものの数千倍の威力を有しているそうだ。核兵器を所持している国がある以上、いつ戦争が起きていつ原爆が投下されるのか、分からない。私は、もしそんなものが私の住んでいる場所に落ちてくると想像してみたら、すごく怖かった。空襲警報に怯えながら、夜も安心して寝られず、学校へ行っても訓練をさせられるばかりだ。安心と自由のない生活を、私は送りたいと改めて実感した。毎日学校に登校して、授業を受け、友達と楽しく過ごせること、家に帰ったら大切な家族と美味しいご飯を食べられることは、当たり前のことではないと感じた。また、戦争は人々の「夢」も奪っていたのではないかと思う。私は、自分の持つ目標を達成するために勉強に励んだり、時に苦労したりする。しかし、戦時中は自由が奪われ、男性は兵に出て、女性は労働者として、子どもたちは成長盛りにも関わらず、食料を探すことに力を入れなければならなかった。戦争が起きなければ、原爆が落とされなければ、生きていた命に可能性があったかもしれない。そう考えると、戦争は世界をより良くするため、そして平和な世界を築くために必要なことだとは決して言えないと感じる。私が今の世界に必要だと感じることは、国は違えど、互いの国を理解し合い、守り合うことだと、この被爆地派遣事業を通して考えることができた。

今、被爆者の平均年齢は86歳を超えた。後世に戦争の恐ろしさを語り継いでいくのは私たちであるという自覚をもった。もう二度と戦争を起こしてはいけない。無限の可能性を持つ尊き命を守るため、被爆者の方の想いを絶やさないうために、発信していくべきだと思う。

「長崎平和祈念式典」

高社中学校 3年

齋藤 翠

8月9日に行われた長崎平和祈念式典に参加した。今年は長崎に原爆が投下されて80年の節目を迎え、長崎に住む人々や私たちのような日本各地から訪れる人々、そして世界各国からも多くの人が式典に参加した。

式典は、被爆者による合唱で幕を開けた。被爆者の平均年齢が86歳を超える中、私たちに実体験を教えてくださいと歌っていて、戦争や原爆の悲惨さ、そして平和とは何かを考えさせられた。

次に献水が行われた。被爆者と被爆者の遺族、小学生、中学生、高校生の代表者が平和の泉を中心とした水を、水を求めて亡くなってしまった被爆者に捧げ、慰霊する儀式である。原爆投下後、街や人々が一瞬にして熱に焼かれ、人々は水を求めた。看護にあたった方は「喉が焼けているから水を与えてはいけない」と、水を与えることができなかった。川は原爆や遺体によって汚染されていたが、それでも人々は水を求めて川へ行った。原爆投下から数時間後に熱が巻き上がり「黒い雨」が降り、有害であると知りながら人々は空に向かって口を開けた。式典の日は朝から雨が降っており、80年前の今日、水を求めて亡くなった人々を吊っているかのように感じた。

原爆が投下された11時2分に黙とうが行われた。目を閉じ、会場には雨の音だけが聞こえていた。黙とうが終了するまでの約1分間、原爆の犠牲者を弔いながら、心の中に様々な思いが込み上げてきた。込み上げてきたのはこれまで知識として学んだことではなく、被爆者の方のお話や原爆資料館で見たもの、そして原爆がどれだけ悲惨だったか、どれだけの人々が苦しみがいたかということであった。この歴史や気持ちを少しでも周りに広めていくことが私たちにできる一番身近で一番大事なことだと感じた。

長崎市長による平和宣言では、長崎から世界へ平和を訴えていた。武力による争いが絶えない現代社会で、唯一の戦争被爆国である日本人として、そして現在最後の戦争被爆地である長崎市民としての訴えであった。日本原水爆被害者団体協議会が昨年ノーベル平和賞を受賞したことに触れ、「長崎を最後の被爆地に」という信念を強く感じた。そして、平和宣言の中で繰り返し「地球市民」という言葉を使っていたことも印象に残った。地球市民という言葉には、人種や国境などの垣根を越え、地球という大きな一つのまちの住人として、共に平和な未来を築いて行こうという思いがこもっている。

平和への誓いでは被爆者代表として、西岡洋さんが当時の様子や平和への思いを語ってくださった。西岡さんは平和宣言をこのように締めくくった。「絶対に核兵器を使ってはならない、使ったらすべてがおしまいです。」この言葉は、西岡さんのように実際の体験をされた方だからその重みがあり、世界中の人々が注目する平和式典での意味はすごく大きいと感じた。

児童合唱では、福山雅治さん作詞作曲の「クスノキ」が歌われた。長崎市には大クスという大きなクスノキがあり、原爆により一時は枯死寸前となったが80年をかけて現在は大きく成長している。被爆しても成長するクスノキは、焼け野原から復興に向かう被爆者らを勇気づけ平和や再生のシンボルとして親しまれている。合唱からは戦争の悲惨さを感じるとともに、平和への希望も強く感じられた。これまで様々な文献や資料から歴史を知ることが多かったが、歌も歴史を知るきっかけになると知った。これから多くの人々が歌い継ぎ、長崎の歴史を風化させないでほしいと願った。

式典を通して、戦争の意味は何なのか。他の方法はないのか。核兵器は必要か。など疑問がたくさん出てきた。現地を感じたことを忘れずにいたいとともに、できるだけ多くの人に伝えていきたい。私たちが伝えていけるのは家族や友人など身近な人だけかもしれないが、私たちにできることをしていきたい。「一人ひとりの力は微力であっても無力ではない」長崎が復興するまでにたくさんの人々が紡いできた歴史を、次は私たちがつないでいくと心に誓った。

「ピースフォーラム平和学習②」

高社中学校 3年

富井 玲葉奈

8月9日の式典後にピースフォーラム平和学習に参加し、県内外の学生との意見交換会をした。意見交換会では、最初にアイスブレイクとしてNGワード自己紹介を行い、次にグループごとに話し合いを行った。テーマは「違い」についてであった。まずは『違いってなんだろう』というテーマを、次に『違いによって起こることは？』というテーマについて話し合った。最後に各グループで2つのテーマから考えられることをまとめ、発表した。意見交換会の後は、特別講演会に参加した。

NGワード自己紹介では、初対面の人たちがばかりでとても緊張したが、各グループにいる青少年ピースボランティアの方々のおかげですぐに緊張もほぐれ、自分の意見を言いやすい雰囲気になった。私も質問してみたが、直接的すぎたせいか、相手にNGワードを気づかれてしまった。直接的過ぎても遠回しにしすぎても良くないので、上手くNGワードを言わせる質問をするのが難しかった。

次に「違い」について話し合った。①『違いってなんだろう』のテーマで私たちのグループは、性格などの内面的な違い、言語や職業・宗教といった環境や文化的な違いなどのあらゆる面からの意見が出た。内面的な違いも、環境や文化によって変わってくるので、どちらもつながっているのではないかという結論になった。多くの意見の中でも似た意見や異なる意見、似ているけど異なる意見など多くの種類の意見が出てきた。個人が思いつく限りの違いをどんどん付箋に書いていって、自分の中から生まれる考えや発想の幅をさらに広げることに繋がる出来事になった。

②『違いによって起こることは？』のテーマでは①で出てきた違いから起こることをグループ内で発表しあった。発表された中から「性別」と「職業」の2つに絞って、違いによって起こることをメリット・デメリットという形で紹介し合った。性別のメリットは多様性、個性を出せること。デメリットは犯罪や偏見が生まれる原因となることなどが出てきた。職業のメリットは自分の得意分野を活かし協力して社会をつくれることだ。違いによって起こることを考えてみたが、一つの違いに対して、メリット・デメリットどちらもあるというのはあまりないように感じた。その後も話し合いを重ね、『違いがあって考え方が異なっていたとしても、お互いに何もすることが「認め合っている」状態である。』と、2つのテーマからまとめられた。これは、違いを認め合うことと反発しないことが、違いを尊重し合う上で大切であるとグループ内で話し合って生まれた結論である。違いを認めるというのは難しいかもしれないが、違いによって反発しないということは難しいことではないと思う。今回の各グループで出てきたまとめを多くの人に伝え、平和への一歩へと向かっていきたい。

特別講演会では、マレーシア元首相のマハティール・ビン・モハメドさんから第一次世界大戦終戦後からの経験談を講演していただいた。

第一次世界大戦は元々国々の戦争を終わらせるために起こったものだった。しかし、世界恐慌後の1939年に第二次世界大戦が始まってしまった。1945年に終戦したが、およそ7000万人が亡くなったと言われている。モハメドさんもまた被害に遭われた。マレーシアは、日本・イギリス・タイ・イギリスの順で植民地になったという。植民地となると食糧難にも陥り、医療機関などのサービスも十分に受けられなかった。二度とこのようなことにならないよう、第二次世界大戦終戦後、武力的解決をやめ平和的に解決するために国際連合を立ち上げた。しかし、経済的利益があることから現在も戦争が絶えず起きている。それは、第二次世界大戦などの大きな戦争を経験していない、戦争の恐ろしさを理解していない若い世代が国を支えているということも関係していると考えられる。世界中が平和であるために、今を生きる私たちができることとはなんだろうか。戦争のない平和な未来へと一歩ずつ歩んでいきたい。